

希望を耕す

「日本だから?」

東京大学教授・建築学
松村秀一
Shuichi Matsumura

「日本にそういうことは期待していない」

本連載第三回で紹介した拙著が『ひらかれる建築―「民主化」の作法』（筑摩書房）と題した新書として出版された。早速アメリカの友人にちらつと話したところ、是非読みたいからアメリカかイギリスの出版社から英訳本を出すのはいかがかという提案を受けた。常々私も日本の建築を取巻く状況を日本語圏外の人に伝える情報が少ないと感じていたので、この提案を受けて、彼がこちらの出版社や編集者に相談できるように目次と概要の英語版を作成して送信した。彼は私の英語を適切に修正してくれた上で、何名かの関係者に送ってくれた。

しばらくして一人目の返事が届いた。日本の建築に関心を持つ読者は多いが、こういうある種の「ビッグ・ストーリー」は、正直なところ日本に期待していない。概ねそういう内容だ。私は「ビッグ・ストーリー」などとは思っていないが、確かに個々の技術や建築家や作品を語る類のものではなく、もう少し時間的なパースペクティブを描こうとはしていたから、当たらずといえども遠からずだ。しかも、言われ

てみると確かにそうだろうと思わせる内容だった。「日本にそういうことは期待していない」、それはこれまでもそうだったし、これからもそうだといいことだ。ただ、私の中ではこれからもそのまま良いのかという思いが頭をもたげた。

時代の先端として日本を自覚する

幸い二人目の編集者からの返事が肯定的なものだったので、英訳化の話はまだあきらめずにいるのだが、「ビッグ・ストーリー」を日本に期待しないというのは、日本が近代以降一貫して欧米先進国追従型でやってきた国だと、かなりの人が認識しているからなのだろう。しかし、今はそういう時代、つまり世界のベクトルがはっきりしていて、その線上で国の先進、後進が明確にわかるような時代なのだろうか。

現代日本の変化の中にも、世界のある種の問題の先端的な部分が十分に含まれ得る。人口減少と少子高齢化に伴うさまざまな現象、例えば建物も含めて多くの普通なもの之余剰になる現象、さまざまな仕事の後継者が育たなくなる現象、成長幻想すら持てない中で人生の豊かさがかこれまでと異なる角度から求められる現象等々

がそうだ。それらに関連して人々の意識が変わり、これまで見られなかったようなさまざまな社会的な取組みが出てきていることを、世界に発信することには十分な意義があるし、相互理解こそが国際化の基本なのだとすると、エキゾチックでクールな日本のサブカルチャーや伝統文化についてと同様に積極的に行うべき発信対象だと思う。

「日本的なこと」の意味を伝えられるか

建築業に関しても、従来日本の状況はごく断片的にしか発信されてこなかった。私の知る限り、バブル期に世界のゼネコン売上げランキング十位以内に複数の日本のゼネコンがランクインした頃、日本のゼネコンの設計施工一括請負、特命契約の多さ、専属的元下関係、自らの研究機関の保有等々の特性と、その強さの秘訣を関連付けて分析した類の英語の本が何冊か出たし、自動化施工の開発が競われていた頃には、海外学術関係者の視察も多かった。しかし、そこで紹介された多くの事柄は個々の技術や組織の特性に関するどちらかという断片的なものが主で、それらの現象の意味を伝えられたかどうか

には疑問が残る。

例えば、当時の自動化施工の現場に案内すると、海外からの視察団は一樣に感嘆するのだが、「何のためにこれを進めているのですか」と素朴に問われると答えに詰まった。

少々毛色は違うがこんなこともあった。日本政府の無償援助でアフリカに建設している学校の現場を見に行ったら、現地の工事関係者から「日本のゼネコンの人が、ブロックを積むのに、糸を張って目地をまっすぐに通すように厳しく監督するのだけど、そのために時間がかかって本来休みの日まで働く羽目になった。そこまでして目地をまっすぐにする意味が全く分からない」という感想を聞いた。日本では当たり前のことのそもそもの意味がわからないのだ。

これらの素朴で普通の国際感覚に出くわした時、日本人同士が顔を見合わせてやや自嘲気味に言うのが「日本だからね」。建築にとつて今以上に世界が舞台になる可能性が高まっている今日、これでは通用しない。「ビッグ・ストーリー」かどうかはともかく、日本的なこの意味を伝える継続的で組織的な努力は、これからとても大事だと思う。



アフリカのブロック積み作業例



日本政府の無償援助で建設されたアフリカの学校例